

家畜改良センターにおける牛のヨーネ病対策の取組



今回は、センターが実施している家畜の伝染性疾病の対策のうち、牛のヨーネ病に関する取組についてご紹介します。

◎ヨーネ病とは？

ヨーネ菌という細菌を原因とした、感染後数年にわたる非常に長い潜伏期間を経た後に発症する伝染性疾病です。主な症状として慢性で頑固な下痢を呈し削瘦します。若齢牛の感受性が高く、多くの場合、ヨーネ菌に汚染された糞便や、糞便に汚染された初乳・飲み水・飼料等を子牛が口から摂取する事により感染します。分娩前後のストレスによって母牛から排菌される事が多いと言われており、特に出生直後の子牛が母牛から感染します。ワクチンによる予防や治療法はありません。

◎防疫対策について

・ヨーネ病を牧場に侵入させないために

センターでは飼養衛生管理基準に基づいて衛生管理区域を設定しています。具体的には、「牧場区域」「飼養衛生管理区域」「畜舎区域」の境界を明確にし、各区域間を人や物が移動する際には、更衣、消毒等を徹底する事により、区域外からのヨーネ菌を含めた様々な病原体の侵入防止を図っています。また、センターでは一部の牧場を除き、育種資源の導入を精液や受精卵で行っています。さらに、業務上の必要があって、病原体侵入のリスクが高いとされる生体を導入する場合には、必ず導入検疫を実施し、ヨーネ病等の家畜の伝染病に感染していない事を確認してから導入しています。



衛生管理区域専用のつなぎ、ヘルメット、長靴の着用

区域入口の踏込消毒槽
手前：水洗用の水
奥：消毒液



車両消毒装置



動力噴霧器によるタイヤ回りの
洗浄・消毒

・**ヨーネ病のまん延を防ぐために**

ヨーネ病は感染牛が無症状であっても排菌する事が多いため、排菌牛が発見された時にはすでに同居牛に感染が広まっている恐れがあります。このことから、万が一ヨーネ病が牧場に侵入した場合のまん延を最低限に抑えるために、普段から早期の親子分離や初乳殺菌、妊娠牛の分娩前検査による清浄確認、若齢牛飼養場所の洗浄消毒や作業動線管理を実施しています。

また、ヨーネ菌は一般細菌と比べ消毒薬に対する抵抗性が高いと言われて、多くの農場で使われる消毒薬には十分な効果が得られないものもあります。このことがヨーネ病対策を難しくする要因の一つです。そのような中、ヨーネ菌に汚染した牛舎、物品、車両等の消毒は、塩素系消毒剤、アルコール、石灰乳等の効果が高いと言われており、センターで対策に取り組む中で、実際に効果を感じています。

なお、消毒を行う際に非常に重要なのが、消毒の前に水洗でしっかりと糞や汚れを落とす事です。場合によっては汎用重質洗浄剤(アルカリ性)を使用して有機物を除去してから消毒薬を使用する事で消毒効果を十分に発揮する事が出来ます。



初乳の殺菌(60°C、30分以上)



親子分離



殺菌初乳給与

・**牧場の清浄性を確認するために**

ヨーネ菌感染牛は、長い潜伏期間があること、排菌が始まっても、排菌したり、排菌が止まったりする(間欠排菌)ことから、検査をしても100%摘発出来る訳ではありません。

このため、センターでは検査が可能な月齢の全頭を定期的に検査する事により、早期摘

発とまん延防止に努めています。具体的には6か月齢以上の全ての牛を対象として、遺伝子検査を年2回実施します。更に種雄牛については遺伝子検査に加え、抗体検査を肉用牛については年1回、乳用牛については年4回実施しています。

◎センターの衛生状況について

家畜改良センターは一部の牧場を除き、国の「牛のヨーネ病防疫対策要領」に基づきカテゴリーⅠ（ヨーネ病の清浄が確認、維持されている農場）を取得しています。なお、カテゴリーⅡ（ヨーネ病の発生があり対策を講じている農場）の牧場では現在、カテゴリーⅠの取得を目指し、鋭意対策を実施中です。

※以下、農林水産省該当ページへのリンクです。

「牛のヨーネ病防疫対策要領」掲載ページ

(<https://www.maff.go.jp/j/syouan/douei/johne/johne.html>)

◎おわりに

ヨーネ病は、一旦侵入を許すと清浄化に大変な苦勞を強いられます。農家の皆様におかれましては、日々侵入防止対策を継続していただきますようお願いいたします。最後までお読みいただき、ありがとうございました。